

ヘコアユの幼期

内田 惠太郎

朝鮮總督府水産試験場

ヘコアユ科 Centriscidae の魚は、半鰐魚類中でも特に奇妙な形をなし、且習性も變つてゐるものであるが、その生活史に関しては知られてゐる處が甚だ少い。筆者は昭和 2 年 (1927) 7 月 28 日奄美大島古仁屋附近の海岸で、ヘコアユ *Aeoliscus strigatus* (GÜNTHER) と思はれる全長それぞれ 7.5, 9.2 及び 11.0 mm. の幼期の魚 3 尾を採集した。こゝにその興味ある點を摘記する。

この科の魚は皆熱帶性で、ヘコアユは琉球方面には稀でない。ヘコアユの成魚は、全長 150 mm. 内外に達し、Fig. 1 のやうな外形をなし、體の表面は、クルマエビ類の甲を思はせる薄い滑らかな、殆ど透明な外甲で掩はれ、體は側扁して薄く、腹線は双狀をなし、全體

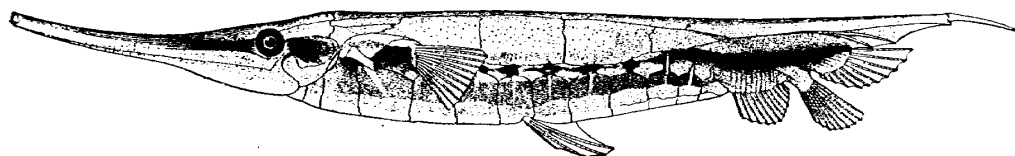


Fig. 1 ヘコアユ *Aeoliscus strigatus* (GÜNTHER)

成魚、琉球産、JORDAN & STARKES 原圖。

が剃刀形をなしてゐる。吻は管狀に延び、尾部は萎縮して腹方に曲り、尾鰭、第 2 背鰭及び臀鰭は皆斜め腹方に向き、その背方に體の背面外甲の一部が長く後方に延びて、その先に一棘を具へ、實際上の體の最後端をなしてゐる。

ヘコアユ類の水中にある姿勢に就ては、或は頭を上にして直立するといひ¹⁾、或は普通の魚のやうに水平の位置を保つといひ²⁾、更にまた頭を下にして倒立してゐるといはれてゐるが、少くとも常時は頭を下にして倒立し、前進するときも殆どそのまゝの姿勢を保つやうである。尾部の特殊な曲り方からもさう考へられる。

1) WILLEY, ARTHUR 1902 Contribution to the natural history of the pearly nautilus. I. Personal narrative, pt. vi. (*Amphisile strigata*.—p. 718. 直立游泳の圖あり、この圖は諸書に轉載されてゐる)。

2) WEBER & BEAUFORT 1922 The fishes of the Indo-Australian Archipelago. IV, p. 19.

幼期 i) 全長 7.5 mm. (Figs. 2 a, b) 體の概形は成魚に比して著しく短かく、且體の表面に骨質の複雑な隆起脈が著しく發達し、吻はなほ短かく、且口は上を向いて口邊に特殊な襞を作る。頭の形と體面に發達した隆起脈とは、タツノオトシゴ *Hippocampus* 殊にその幼期の形を想起させるものがある。第1背鰭は最前部の棘のみが現はれ、第2背鰭には9軟條

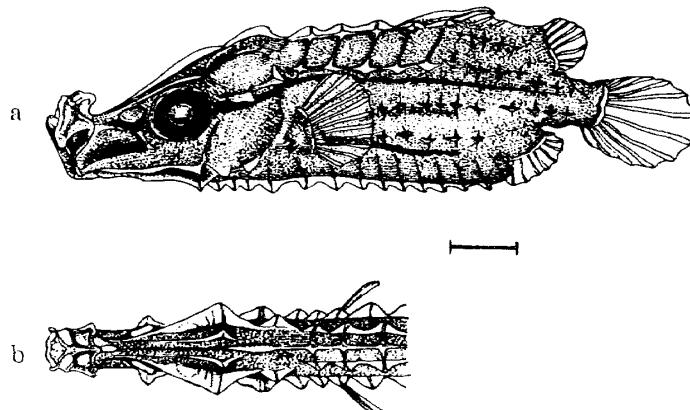


Fig. 2 a, 全長 7.5 mm. b, 體前半の背面圖。

横線は實長を示す。

Camera lucida 使用, 筆者畫。

これは更に體側やゝ上方を後走して尾柄部に入る。胸鰭基底の後方にも縦走する1黒線がある。

ii) 全長 11.0 mm. (Fig. 3) 大體前時期と變らないやうであるが、仔細に見るときは、體形上重要な變化が起りつゝあるのがわかる。即ち體は全體として長くなり、殊に頭部吻部に

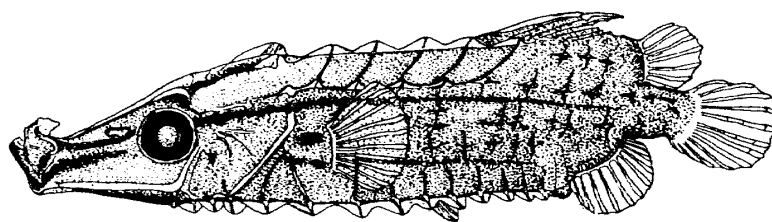


Fig. 3 全長 11.0 mm. 横線は實長を示す。

Camera lucida 使用, 筆者畫。

前時期とほゞ等しいが、脈はやゝ低く、基底は廣くなつてゐる。恐らく成長に従ひ更に脈が低く基底が廣がつて、成魚に見るやうな滑らかな外甲を形成するのであらう。色彩も大體變りないが、體の側下部に多少黒線が増加してゐる。

全長 9.2 mm. のものでは i), ii) の中間の形が見られる。

この幼期と成魚との形を比較するに、成魚に伴ひ、恰も、吻端と第1背鰭前部の棘とを兩手につまんで、前後に引延したやうな形に變形してゆく。更に面白いことは、幼期に於ては、

臀鰭にも9軟條が現はれてゐるが、これらはなほ完成せず、尾鰭には12軟條が現はれてゐる。背鰭臀鰭及び尾鰭の位置は、殆ど常態であるが、注意して見るときは、第2背鰭はやゝ後方に移り、尾鰭はわづかに下に屈してゐる。胸鰭はよく發達し、腹鰭はなほ原基狀、色彩は全體として濃褐色、吻側より眼窩を越えて後方に縦走する黒線があり、

於て著しく、これとともに體の垂直軸が後方に倒されたやうに、背鰭は後方に移り、第2背鰭は明らかに臀鰭よりも後方にあり、尾鰭は一層下方に向く。體表面の隆起脈は

體側を縦走する黒線の後端はなほ殆ど常形の尾柄部の側面に入つてゐるが、尾部が著しく下向きに曲つてゐる成魚では、この黒線はそのまゝ水平の位置を保つてゐるので、丁度體の尾部が黒線から抜け出して下に曲つたやうな觀を呈する。

筆者は上記 3 尾の幼魚を、海岸の岩礁間の淺所で發見したが、最初は水中に小さな黒い塵のやうなものが懸つてゐると思つた。注意して見るとそれが小魚で、頭を下にして水中に倒立靜止してゐるのであつた。これを靜かに撫綱で追ふと、頭部をやゝ前方にして、倒立の姿勢のまゝで前進した。成魚が倒立の姿勢のまゝ、背面を前に向けて前進出来ることは、尾部が腹面の方に曲つてゐることから當然諒解出来るが、幼期の尾部のまだ殆ど曲つてゐない時期に、既に倒立前進の習性が現はれてゐることは注意すべきである。即ち、こゝに於ても形態上の變化に先立つて既に習性上の變化が現はれてしまつてゐるのを見るのである。